



100人で盛り上がるのが協奏曲の楽しさです —— 五嶋 龍

2014年、26歳の五嶋龍は欧米2つのオーケストラの日本ツアーに同行して協奏曲を弾く。ケント・ナガノ指揮モントリオール交響楽団とは、ストラヴィンスキーだ。

すでに7月、レナード・スラットキン指揮フランス国立リヨン管弦楽団の日本ツアーではラロの「スペイン交響曲」を披露した。五嶋龍本人によれば「1年に2回、日本で協奏曲を弾いて回る機会は滅多にない」。協奏曲の醍醐味とは、何だろう？「何と言っても100人で同時に演奏すれば音量、エネルギーが出て盛り上がる。お祭り騒ぎの楽しさに尽きる」と、屈託がない。「ソリストが自分勝手に弾くよりも、素晴らしい指揮者とのコラボレーションで全体をカッコ良くする方が、客席で聴いていてもポジティブに思う」とも。「リサイタルが1時間以上を費やし、自分の色々な面をショウケースのように見せるのに対し、協奏曲は15~45分の短期決戦だから、息の合う指揮者との出会いが欠かせない」という。

ケント・ナガノとは初共演。「実は、マエスト

ロ・ナガノの指導を受けたことがあります」。場所はドイツのシュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭。ピアノの児玉桃、チェロの石坂団十郎とのトリオで武満徹の「ピアノ三重奏曲」を演奏するのに先立ち、武満と個人的に親しく、いくつもの作品を指揮してきたナガノにコーチを頼み、あれこれ助言をしてもらったそう。日系米国人のマエストロと米国生まれの日本人ヴァイオリニストが北米大陸におけるフランス文化の「飛び地」、モントリオールで出会った後、日本各地を回る。ツアーの舞台設定自体が、とてもコスモポリタンである。「英仏が混交していて、純粋のラテンとも違う不思議な雰囲気だった」。龍はモントリオールに立ち寄った時の印象を振り返り、「どのような感じの共演になるか興味津々」と期待をこめて語る。

ストラヴィンスキーはケントの提案だが、「もともと好きな曲だった」。「ロマンティックというよりはインテリジェント。メロディーがいくつかあるが、むしろアンサンブルやリズム、風変わりな和声の方に耳がいき、聴いていて楽しい。確かにヴァイオリニストではない作曲家だと実感させる指づかいもあるけど、パガニーニほどの超絶技巧ではない。あんまり重苦しくない点を含め、バーンスタイン作曲の『セレナーデ』に通じる雰囲気もあって、技術より感覚を試される協奏曲だ」と、アプローチの角度を見据える。ストラヴィンスキーはロシア生まれだが、パリで名を上げた後に米国へ移り、1971年にニューヨークで亡くなった。「もちろん私が生まれる前だけど、ウィリアム・シューマンと仲良しで、しばしばジュリアード音楽院を訪ねていたという話は聞いたことがある」「ロシアから出発して少しフレンチ、かなりアメリカンな要素を採り入れ、独自の近現代音楽を築いた作曲家」というのが、龍のストラヴィンスキー観だ。

龍とのインタビューは何年ぶりだろう？小柄でシャイな天才少年は空手に打ち込んだ成果もあってか、がっちりした体格と長身、何よりも知的な雰囲気の青年に変貌した。音楽的にも「変わったね」と言われるのは「褒め言葉なのだ」と思うようにしている。「自分自身でも『変わった』と感じることはあるの？」と尋ねてみた。「周りの意見を、よく聞けるようになってきたかなあ」が答え。「人の言うことを聞かないと、コラボレーションはできないので」。ケントとの協奏曲がますます、楽しみになってきた。

取材・構成：池田卓夫(音楽ジャーナリスト)



最高のキャストで送るオペレッタの代表作!

『こうもり』で大好評を博した国内外の歌手たちが東京芸術劇場に再集結コンサートホールで繰り広げられる一夜限りのパーティーは見逃せない!

シアターオペラってなに?

「クラシックの演奏会に行くのと同じ感覚で、オペラも気軽に楽しめればいいのに…」そんな期待に応えて誕生した東京芸術劇場のシアターオペラシリーズは今回で8回目を迎える。舞台装置が組まれたコンサートホールは一夜限りのオペラハウスと化し、『イリス』『カルメン』『こうもり』など、これまで上演された作品は多くの感動を生み出してきた。

「でもオペラってなんか難しそう…」そんな心配はご無用。遠い異国が舞台の原作を、日本を舞台にした設定に読み替えることで視覚的に違和感のないキャストिंगを実現しているのもシアターオペラの特徴だ。そのうえ、今回満を持してお届けするのは、見たら誰でも幸せになれるオペレッタの名作『メリー・ウイドウ』。これまでオペラを見たことのない方でも、名曲に酔いしれながら楽しい一夜を過ごせること間違いなしの作品だ。

見たら幸せになれるオペレッタ

主人公ハンナは年老いた銀行家と結婚する

も、夫は結婚後すぐに他界。一国の財政にも関わるほど莫大な遺産を手にした「陽気な未亡人(The Merry Widow)」のハンナが誰と再婚するのか？ 国中はこの話題で持ちきりだ。かつてはハンナと恋愛関係にあったが、未だ独身のダニロは毎日キャバレー通い。そんなある日、ダニロは未亡人となったハンナとばったり出会ってしまう。なかなか素直になれない二人だが、その距離は徐々に近づいていき…

この二人を中心に、一夜のパーティーで描かれる男と女の恋模様が『メリー・ウイドウ』の見どころだ。原作ではパリで開催されているパーティーも、今回の上演では21世紀の東京を舞台とした設定に読み替えられ、日本人キャスト同士のやりとりは日本語で上演される。そしてその物語は、作曲家フランツ・レハールの名曲に乗って進んでいく。1905年のウィーンでレハール自身の指揮によって初演されたこの作品は、ウィーン・オペレッタの「黄金の時代」を築いたヨハン・シュトラウス2世『こうもり』以来の大ヒットを記録し、「白銀の時代」と呼ばれる次の一時代を築ききったこととなった。

最高のキャストが再集結!

今回の『メリー・ウイドウ』は、前回大好評を博したシアターオペラ『こうもり』の続編として企画され、小川里美(ハンナ)、ペーター・ボーディング(ダニロ)、小林沙羅(ヴァランシエンヌ)、ジョン・健・ヌッツォ(ロジヨン)、セバスチャン・フツマン(ツェータ)ら黄金のキャスト陣が東京芸術劇場に再集結するのも大きな見どころだ。また長年にわたり本場ウィーンの観客を魅了し続けた名歌手メラニー・ホリディもスペシャルゲストとして2年連続で参加し、彼女の歌声によって一夜のパーティーが白銀色に彩られるのも楽しみだ。

シアターオペラでは久々の登場となる読売日本交響楽団を指揮するのは、ドイツ国内の歌劇場で『メリー・ウイドウ』をレパートリーとする若手ミハエル・バルケ。演出の茂山童司と美術の杉原邦生をはじめとする、若々しいスタッフ陣たちにも注目だ。

最高のキャストでおくるオペレッタの代表作『メリー・ウイドウ』。2015年2月22日、コンサートホールで繰り広げられる一夜限りのパーティーは、絶対に見逃せない!

*1900年から1920年ごろにかけてウィーン・オペレッタが再び隆盛した時代は「オペレッタの白銀時代」と呼ばれ、レハールのほかエメリッヒ・カールマン(『チャルダシュの女王』)らが優れたオペレッタを作曲した。

文：横堀応彦(ドラマツルク)

石川県音楽文化振興事業団×東京芸術劇場 共同制作公演
東京芸術劇場 シアターオペラ vol.8
F.レハール 喜歌劇『メリー・ウイドウ』全幕

2015年2月22日(日) 15:00開演
コンサートホール

指揮：ミハエル・バルケ
出演：セバスチャン・フツマン/
小林沙羅/ペーター・ボーディング/
小川里美/ジョン・健・ヌッツォ ほか
管弦楽：読売日本交響楽団
合唱：東邦音楽大学合唱団
演出&台本：茂山童司
料金：S席10,000円 A席8,000円
B席6,000円 C席4,000円
D席3,000円 E席1,500円
一般発売：9月30日(火)

金沢公演：2015年2月28日(土)金沢歌劇座
管弦楽：オーケストラアンサンブル金沢

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
公益財団法人石川県音楽文化振興事業団
金沢歌劇座(公益財団法人金沢芸術創造財団)
助成：平成26年度 文化庁 劇場・音楽堂等活性化事業

海外オーケストラシリーズ II・III	
<p>モントリオール交響楽団 10月10日(金)19:00開演 コンサートホール 指揮：ケント・ナガノ ヴァイオリン：五嶋 龍</p> <p>ドビュッシー/交響詩『海』 ストラヴィンスキー/ヴァイオリン協奏曲 二調 ムソルグスキー(ラヴェル編曲)/組曲『展覧会の絵』 S席18,000円 A席13,000円 B席9,000円 C席5,000円 D席3,000円 *SS席22,000円</p> <p>主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)</p>	<p>詳細はP11へ</p> <p> ケント・ナガノ</p> <p> 五嶋 龍</p>
<p>フィルハーモニア管弦楽団 2015年 3月7日(土)14:00開演 コンサートホール 指揮：エサ=ベッカ・サロネン ヴァイオリン：ヒラリー・ハーン</p> <p>シベリウス/交響詩『トゥオネラの白鳥』 ブラームス/ヴァイオリン協奏曲 ベートーヴェン/交響曲第3番 変ホ長調『英雄』 S席19,000円 A席15,000円 B席11,000円 C席7,000円 D席4,000円 *SS席22,000円 一般発売：10月7日(火)</p> <p>主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)</p>	<p> エサ=ベッカ・サロネン</p> <p> ヒラリー・ハーン</p>